表紙・裏表紙解題

泉　雅博

二〇一七年三月二十三日から二十六日にかけて台湾に出掛けてきた。一行は、池上貞子先生、矢島新先生に、大学院生三名と泉の六名である。目的は、台北の国立故宮博物院に所蔵される跡見花蹊の作品の調査である。元学長嶋田英誠氏によってその存在は確認されていたが、ぜひ現物をこの眼で見てみたいという思いからの訪問であった。

作品は、故宮博物院の所蔵品目録に『故畫　清花蹊女史冊頁』として登載、画一二葉が描かれた画帖で、順番に「山雀」「花卉翎毛」「桃花黄鸝」「月季翎毛」「楓木翠鳥」「鷸鳥」「絲瓜麻雀」「秋葵山雀」「紅蓼鵪鶉」「蘆葦夜鷺」「天竺檀鳥」「臘梅山雀」の題が付されている。「自識」には、「明治四年辛未夏　四月寫於東京寓　處時飛花入研池　頗快人志　花蹊女史迹見瀧」とある。

「故畫」とは、皇帝への献上品として、かつて北京の故宮に所蔵されていたものをいうと、学芸員の陳階晉氏から説明を受けた。花蹊が作品を描き上げた明治四（一八七一）年当時は清王朝の時代で、皇帝は第十代同治帝である。

明治四年、日本と清国との間には、日清修好条規が結ばれている。日中両国の間には非常に長い交流の歴史があるが、それは条約によるものではなかった。両国間の初めての条約は明治四年の七月二十九日に締結されているが、調印に臨んだ欽差全権大臣は大蔵卿伊達宗城であった。その宗城が日本を出発したのは五月十七日である。当時、外務卿に就任していたのは、跡見家が親しく交わっていた沢宣嘉であり、宣嘉は花蹊の画力を高く評価していた。このような点などを勘案すると、伊達宗城が調印のために清国へ向かった際に、日本国から皇帝への献上品の一つに花蹊の画帖が含まれていた可能性が大である。

皇帝の下にあった美術品などは、清朝の崩壊後、北京の故宮博物院に所蔵された。それらの所蔵品のうち重要文物は、その後、戦火や進駐してきた日本軍の略奪などから守るために疎開されることになるが、第二次大戦後も国共内戦の激化にともなって、中華民国政府により第一級所蔵品が台湾に運び出された。そして、そのなかに花蹊の作品も含まれていたのである。まことに数奇な運命をたどり、現在、故宮博物院に所蔵されるにいたったと言えるだろう。

昨年度の『人文学フォーラム』第一五号では、表紙を「山雀」、裏表紙を「花卉翎毛」が飾った。今号では、表紙に「桃花黄鸝」、裏表紙には「自識」を採用した。